

清朝の北京語の尖音團音について

陳 曉

0. はじめに

従来北京語の尖音團音の統合過程に関しては多くの研究がなされており、異なった見解が出されている。この點に關し本文では明朝から清朝までの韻書『重訂司馬溫公等韻圖經』、『李氏音鑑』、『圓音正考』と、滿洲語と漢語で書かれた啓蒙書『清文啓蒙』、ならびに朝鮮時代の漢語教科書などの文獻を用い北京語の尖音團音の統合の過程を調査し、特に『圓音正考』の性質についても論じたい。

1. 先行研究

北京語の尖音團音の統合に關しては、まだ定説がない。總括してみれば、ほぼ三つの主要な見解がある。

1.1 北京語の尖音團音は清代の後半（19世紀中葉）までに統合が完了したという説。

王力『汉语语音史』（1985：394）は以下の通り指摘している：

清乾隆年間無名氏《圓音正考》說：“試取三十字母審之，隸見溪群曉匣五母者屬團，隸精清從心邪五母者屬尖。”由此看來，似乎清初見系已經分化出 [tɕ, tɕh, ɕ]。明隆慶間本《韻略易通》說：“見溪若無精清取，審心不見曉匣跟。”由此看來，似乎明隆慶間（1567-1572）見系已經分化出來 [tɕ, tɕh, ɕ]……但是，《五方母音》以“京堅根幹”同隸見母，顯然見系在清代前期還沒有分化為 [k, kh, x]、[tɕ, tɕh, ɕ] 兩套。可以設想，見系的分化在方言裡先走一步，在北京話裡則是清代後期的事了。

藤堂明保『ki- と tsi- の混同は 18 世紀に始まる』（1960）：

兩者 (ki- 類と tsi- 類) の混同が完全に普及して、今の北京語のような状態となったのは、大體嘉慶道光のころ、つまり 19 世紀の初めである。

1.2 北京語の尖音團音は清代の前半 (18 世紀中葉) までに統合が完了したという説。

唐作藩『汉语语音史教程』(2011: 161-162) は以下の通り指摘している：

從近古到現代，漢語聲母演變中還有一個突出的現象，這就基 j[tɕ] 欺 q[tɕh] 希 x[ç] 的產生。這有兩個來源，即見組和精組。……《西儒耳目資》(1626) 中的“格克”、“機欺”、“孤枯”、“居渠”的聲母都用 k[k]、‘k[kh] 表示，而“則測”、“精清”、“宗蔥”、“疽趨”都用 ç[ts]、‘ç[tsh] 表示。這也表明當時北京音仍未分化。但是我們現在可以肯定，這兩組聲母的演變分化也不會晚於 18 世紀中。因為清代無名氏的《圓音正考》已經要求人們注意辨別尖團音了。

1.3 北京語の尖音團音は明代 (17 世紀) までに統合が完了したという説。

李新魁『普通话语音发展述略』(1997: 217) は以下の通り指摘している：

k (見) 組の二等韻字在元代時產生了 -i- 介音，念為 kia- 等，三、四等字是念為 kie- 等 (其 -i- 介音本就存在)。到了明代，它們的聲母變成了 tɕ。精組聲母中的 tsi-，也在明代變為 tɕi-。k 組本為團音，ts 組本為尖音，兩者都變為 tɕ 組，就叫“尖團不分”。

2. 各見解の問題點

以上の北京語の尖音團音の統合の時期に關する見解は異なっている。李新魁は明代、王力は清朝後半と指摘し、200 年ぐらいの隔たりがある。

すべての見解は、『圓音正考』という文獻について言及している。この書は、尖音團音を區別するために作られた。この中には、二つの序がある。原序は 1743 年 (乾隆癸亥年) に作られ、後序は 1830 年 (道光庚寅年) 烏扎拉氏文通によって書かれている。この二つの序は 100 年近い隔たりがある。後序では「雖博雅名儒、詞林碩士，往往一出口而失其音」と指摘している。即ち、それらのすぐれた學者でも尖音團音を區別できなくなった。しかし、原序ではそのようなことについて言及していない。したがって、原序と後序を混同し、尖音團音

を合流した時期を清代の前半とした見解は、恐らく実際の状況と一致しないだろう。

ここで注意すべき点は、本文で論じる「尖音團音の統合」は「尖音團音の口蓋化（Palatalization）」とは違うということである。「尖音團音の統合」は、尖音（精組細音）と團音（見組細音）が混同され、區別できないという状態である。これは、尖音團音の口蓋化（Palatalization）とは違う概念である。尖音團音が統合される前に、尖音が先に口蓋化（Palatalization）したか、團音が先に口蓋化したかという問題についても異なった見解がある。藤堂明保（1966：11）は見組團音が先に口蓋化したと指摘し、馮蒸（1997：302）は精組尖音が先に口蓋化したと指摘している。したがって、尖音と團音のどちらが先に口蓋化したかについては、二つとも可能性があるが、本文でとりあげる「尖音團音の統合」と関係ないので、ここでは論じない。

3. 近世北京語の音聲を反映した韻書に表される尖音團音

北京語の音聲を反映した韻書には、學界の一般的な見方によると、二つの文獻がある。一つは明・徐孝『重訂司馬溫公等韻圖經』（1606）、もう一つは清・李汝珍『李氏音鑑』（1805）である。

3.1 『重訂司馬溫公等韻圖經』（1606）に反映した尖音團音

郭力（2004：2-3）によると、『重訂司馬溫公等韻圖經』は當時の北京語によって作られたものである。この書の音韻體系の特徴は：聲母は19あり、濁音はすでに消失し、清音と統合している；韻母は23あり、入聲はすでに消失し、-m 韻尾は -n 韻尾に統合している；聲調は平（陰平）、上、去、如（陽平）のような四聲であり、平聲は陰平、陽平に分かれ、全濁上聲は去聲となっている。

『重訂司馬溫公等韻圖經』に反映された尖音團音はまだはっきり區別されている。先行研究をまとめると、この文獻の尖音團音の状況は以下の通りである：

尖 音	團 音	著 者
(6) 精母例字：增贈 (7) 清母例字：妻齊 (8) 心母例字：西席須徐	(17) 見母例字：皆 及 (18) 溪母例字：欺奇 (19) 曉母例字：虛喜	王力 1985：391,393
ts (精) (精、從仄)：裁 sic 在 tsh (清) (清、從平)：妻齊 s (心) (心邪)：西席須徐	k (見) (見、群仄)：皆雞及 kh (溪) (溪、群平)：欺奇 x (曉) (曉匣)：虛喜	葉寶奎 2001：142
嚼 [tɕio ³]，又音 [tɕiao] 雀 [tshio ³]，又音 [tshiao] 雪 [syE ³]，又音 [sye] 爵 [tsio ³] 妾 [tshie ³] 屑 [sie ³] 血 [syE ³] 積 [tsi ³] 削 [sio ³]	角 [kio ³] 卻 [khio ³] 學 [ɕio ³]，又音 [ɕiao] 厥 [kye ³] 怯 [khie ³] 歇 [xie ³] 旭 [xy ³] 結 [kie ³]	郭力 2004：58,95-99

3.2 『李氏音鑑』(1805) に反映された尖音団音

『李氏音鑑』(卷四) には「北音不分香廂、薑將、羌槍六母；南音不分商桑、張臧、長藏六母。」と記載されている。つまり、見組と精組の細音はすでに混同されていた。楊自翔(1987：15) は、『《李氏音鑑》』所记录的北音读法，实际就是二百年前北京话里的读音』と指摘している。『李氏音鑑』の反切によると、尖音団音はすでに統合されているのがわかる。例を挙げると：

尖音：絶，精母字	反切が同一：舉爺
団音：決，見母字	
尖音：積，精母字	反切：金醫，反切上字：団音見母字。
尖音：鵠，清母字	反切：勸臥，反切上字：団音溪母字。
尖音：七，清母字	反切：羌醫，反切上字：団音溪母字。
尖音：切，清母字	反切：欽嗟，反切上字：団音溪母字。

この二つの文獻によると、1606 年頃には北京語の尖音団音はまだはっきり區別され、1805 年頃には、すでに統合されているのがわかる。以下、『圓音正考』(1743) の時期に、尖音団音の状況がどうだったのかについて論じたい。

4. 『圓音正考』について

ほとんどの先行研究は、『圓音正考』によって、尖音團音の統合が遅くとも 18 世紀中葉に完成したとする見解が少なくない。この見解が確實かどうかについて、まず『圓音正考』の性質について論じる必要があると考える。

4.1 『圓音正考』の著者と形式

『圓音正考』（1743）は、北京語の状況を反映し（馮蒸 1997：289）、尖音團音を最も早く分析した文獻である。各組の漢字の前に、滿洲文字の注音がある。この本の著者について、ほとんどの學者は「無名氏」としているが、馮蒸（1997：289-291）は羅常培、董少文の見方に同意し、この書の著者は原序の最後に附された「存之堂」とであると指摘している。この「存之堂」は、出版元の名前のようなが、この本は元々寫本であつたため（後序には「向無刻本，都係手抄」と記載されている）、「存之堂」は出版元である可能性は低く、「存」が氏、「之堂」が名であるということもあり得るだろう。

『圓音正考』は大著ではない。原序によると、「凡四十八音，爲字一千六百有奇。每音各標國書一字於首，團音居前，尖音在後」と記載されている。即ち、全書は四十八組の音類があつて、漢字は約一千六百字ある。これらの音類をそれぞれ滿洲文字で注音し、「尖音團音」と注釋し、漢字をミニマル・ペアで配列している。例を挙げると（注音部分の轉寫は Möllendorff 1892 による）：

音類	轉寫	IPA	漢 字	備 考
團音	ki	khi	其欺期旗棋麒麒祺淇其琪其欺奇騎綺綺綺欹琦 崎鼓溪谿起乞杞芪祈啟契氣棄祁愨元企器豈泣耆 ……	原書總計 75 字。
尖音	ci	tshi	齊臍妻淒戚七緝葺砌漆蹙……	原書總計 20 字。
團音	gi	ki	及級汲汲己記記忌奇寄騎騎幾幾饑肌羸基箕期幾 譏機機吉髻妓雞季冀亟極稽繼急計激姬給……	原書總計 94 字。
尖音	ji	tsi	卽鯉脊積績濟濟劑薺籍跡疾祭集稷編輯……	原書總計 53 字。
團音	hi	xi	奚蹊希唏唏喜嘻嬉熹系犧曦兮吸戲翕檄熙……	原書總計 64 字。
尖音	si	si	析皙晰嘶浙西昔惜夕徙息熄熄錫烏悉蟋犀撕洗細 習席膝襲璽棲……	原書總計 46 字。
團音	kiya	khia	恰恰	原書總計 5 字。
尖音	ciya	tshia	漢字無し	無し

團音	giya	kia	家嫁稼加嘉駕伽架茄迦袈賈價夾英假葭甲戛佳點	原書總計 44 字。
尖音	jiya	tsia	漢字無し	無し。
團音	hiya	xia	暇遐霞蝦峽狎洽轄轄下夏匣狹.....	原書總計 25 字。
尖音	siya	sia	斜	原書 1 字のみ。

説明：(1) 滿洲語の音韻體系は漢語と異なる。例えば、滿洲語の k は漢語の有氣音（溪母）、g は漢語の無氣音（見母）に相當する。(2) 『清文啓蒙』(1730) (宏文閣藏板 27b)：「此 sit 在聯字首。念詩特西特俱可。單用仍念西特。」と記載された。山崎 (1994) 「si の母音は弱化が起こることもあり、それが「詩」に近い音價とみなされる場合と考えられる。」と指摘された。滿洲語は恐らく s → ɕ (ʃ) / ___i という変化があるため、『圓音正考』の si の發音は si であるか ɕi (ʃi) であるか分らない。(3) 滿洲文字の注音は實際の漢字音とやや違うかもしれないが、この本において尖音團音をはっきり區別していたことは確實であろう。

4.2 『圓音正考』の價值

著者がこの『圓音正考』を作った目的は、原序に見られるはずである。上海圖書館藏清道光十年 (1830) 三槐堂本によると、原序は以下の通りである：

自西域肇爲字母釋神珙因之作等韻，從而爲四聲，衡而爲七音，韻學於是備矣。第尖團之辨，操觚家闕焉弗講，往往有博雅自詡之士一矢口肆筆而紕繆立形，視書璋爲璫，呼杖爲杖者，其直鈞也，試取三十六字母審之，隸見溪郡曉匣五母者屬團，隸精清從心邪五母者屬尖，判若涇渭，與開口閉口、輕唇重唇之分有釐然其不容紊者。爰輯斯編，凡四十八音，爲字一千六百有奇。每音各標國書一字於首，團音居前，尖音在後，庶參觀之下，舉目了然。此雖韻學之一隅，或亦不無小補云。乾隆歲次癸亥夏四月存之堂識。

「乾隆歲次癸亥」は 1743 年。筆者の解釋によると、この原序の意味は大體次の通りである：「等韻學の出現によって、音韻學は完備するようになった。しかし尖音團音の區別は知識人に顧みられることがなかった。大學者を自任する人ですら、あまりはつきりとは分析できなかった。そこで、私は三十六字母に

より、見母・溪母・群母・曉母・匣母を團音、精母・清母・從母・心母・邪母を尖音としてまとめた。つまり尖音と團音は、開口と合口、重唇と輕唇のように、はっきりと區別されるものなのである。」原序は字數こそ少ないものの、音韻學の理論について鋭い見解があった。

『圓音正考』は、理論上尖音團音の區別を分析し、それによって漢字を配列した。そこで唐作藩 2011 は『圓音正考』の時期に、尖音團音がすでに混同していたため、著者は人々に尖音團音の區別を注意するように、この書を作ったと指摘している。しかし、この見解は恐らく問題があると思われる。しかし、原序の中には、「尖音團音の混同」について言及していない。すべては「韻學」についての見解である。

そのため、『圓音正考』を作った目的は、音韻學の理論を補足しようとしたためだろう。特に、「尖音團音」という概念は、この本に初めて出現した。この新たな概念の出現は、音韻學の理論に貢献し、重要な意義があった。

原序（1743）と比較すると、烏扎拉氏文通が著した後序（1830）の内容はかなり違う。後序の一部は以下の通りである：

……圓音正考一書不知集自何人，蓋深通韻學者之所作也。……所謂見溪群曉匣五母者下字爲團音，精清從心邪五母下字爲尖音，乃韻學中之一隅，而尖團之理一言以蔽之矣。夫尖團之音，漢文無所用，故操觚家多置而不講，雖博雅名儒、詞林碩士往往一出口而失其音，惟度曲者尙講之，惜曲韻諸書只別南北陰陽，亦未專晰尖團，而尖團之音，翻譯家絕不可廢，蓋清文中既有尖團二字，凡遇國名地名人名，當還音處必須詳辨。存之堂集此一冊，蓋爲翻譯家而作非爲韻學而作也明矣。每遇還音疑似之間，一展卷而即得其真，不必檢查韻書，是大有裨益于初學者也。……道光十年歲次庚寅春月望日實錄館協修官滿洲烏扎拉氏文通謹識。

烏扎拉氏文通の後序によると、次のようなことがわかる：

（1）この後序は道光十年（1830 年）に作られ、原序の 1743 年との間に一世紀近い隔たりがある。後序の時期には、尖音團音はすでに混同されていた。ただ、役者（京劇など）、特に翻譯者は尖音團音を區別する必要があるため、『圓音正考』は良い参考書となる。

（2）後序には「存之堂集此一冊，蓋爲翻譯家而作非爲韻學而作也明矣。」（存

之堂がこの本を編集したのは、明らかに翻譯者のためであって、音韻學のためではない。)とあるが、これは烏扎拉氏文通自身の考えだから、原序とは違う。原序には「此雖韻學之一隅，或亦不無小補云」とあり、この書は音韻學の理論を補足しようとしたものである。また、烏扎拉氏文通の官職は實錄館協修官であり、これは歴史の編纂關係を擔當する仕事である。この「烏扎拉氏文通」という氏名は明らかに滿洲人であり、仕事は翻譯關係であつたと思われる。彼が歴史文書を編纂していた時、滿漢對譯の問題（國名地名人名）があつたのは間違いないだろう（後序「而尖團之音，翻譯家絕不可廢…凡遇國名地名人名，當還音處必須詳辨。」）。この場合、『圓音正考』はちょうど利用に適している。したがって、烏扎拉氏文通が「蓋爲翻譯家而作非爲韻學而作也明矣」と思っていたことは理解できる。

なお、清朝中期以降、ほとんどの滿洲人は滿洲語ができなくなっていた。ただ、滿漢翻譯官、蒙漢翻譯官というのは重要な官職だったので、當時の人々は翻譯官になるため、滿洲語を習わなければならなかったが、あまり精通はしなかった。清朝嘉慶時期の滿漢合璧の教科書『清文指要』（三槐堂藏版 1809）の序には「又有可笑者，滿洲話還沒有影兒，就先學翻譯的，這等人，何異北轅赴粵，煮沙要飯者乎。任憑漢文怎麼精要，下筆時，滿文短少，不合卯榫，不成套數，雖學至老，難免庸愚名色。」（また、滿洲語の目處もついていないのに、まず翻譯することを學ぶというおかしな者がいる。このような人は、行動と目的が一致しないではないか。漢文にどんなに精通しているとしても、書く時に、滿洲語の語彙が少なく、正確ではなく、技法も熟練していないのであれば、老人になるまで學んでも、愚かであることを免れない。）と言う。この状況では、滿洲語に精通していない翻譯者たちにとって『圓音正考』は確かに翻譯の役に立ったことであろう（後序に「是大有裨益于初學者也」（初心者にとって役に立つものだ）と言う）。しかしながら、翻譯者がよく『圓音正考』を参考にしていたことは事實だとしても、この本が元々翻譯者のために作られたものだという見解は正確ではないだろう。

4.3 まとめ

『圓音正考』（1743）の著者は精組細音と見組細音をそれぞれ「尖音」、「團音」と命名し、ここから音韻學に新たな概念が出現した。

原序（1743）と後序（1830）の内容によると、1743年頃に尖音團音はまだ區別されていたが、1830年頃にはすでに混同した。

5. 朝鮮時代の漢語教科書及び韻書に反映された尖音團音

5.1 朝鮮時代の漢語教科書

朝鮮時代の漢語教科書は、ハングルで漢字を注音し、近代漢語の音聲を反映している。この章では、汪維輝『朝鮮時代汉语教科书丛刊』（中华书局2005）により、また『奎章閣資料叢書・語學篇』（서울大學校奎章閣）を参考にして、『老乞大』、『朴通事』などの文獻の影印本を選び、ハングルの注音により、近代漢語の尖音團音の變化を論じる。

『老乞大』、『朴通事』及び『華音啓蒙諺解』は朝鮮時代の最も重要な教科書である。これらの教科書の、音聲、語彙、文法は當時の北京口語に基づいて作られたものである。出版された年代は以下の通りである：

資料名	年 代	注音の有無
原本老乞大	1346年頃	ハングル注音無し。
老乞大諺解	1670年刊行	各漢字の左右にハングルの注音があり、右側は當時の漢語官話の音聲である。
朴通事諺解	1677年刊行	各漢字の左右にハングルの注音があり、右側は當時の漢語官話の音聲である。
老乞大新釋	1761年刊行	ハングル注音無し。
朴通事新釋諺解	1765年刊行	各漢字の左右にハングルの注音があり、右側は當時の漢語の音聲である。
重刊老乞大諺解	1795年以後刊行	各漢字の左右にハングルの注音があり、右側は當時の漢語の音聲である。
華音啓蒙諺解	1883年刊行	漢字はそれぞれハングルの注音がある

これらの教科書のうち、『原本老乞大』と『老乞大新釋』はハングル注音がないため、本稿では他の五つの教科書から選んだ。分析の便宜のため、まず『老乞大諺解』、『朴通事諺解』、『華音啓蒙諺解』の冒頭の第一節を抜粋してみたい：

(1) 『老乞大諺解』(1670) 第一節

大哥你从那里來？

我從高麗王京來。

如今那里去？

我往北京去。

你幾時離了王京？

既是這月初一日離了王京，到今半箇月，怎麼才到的這裏？

我有一箇火伴落後了來，我沿路上慢慢的行著等候來，因此上來的遲了。

那火伴如今趕上來了不曾？

這箇火伴當便是，夜來才到。

你這月盡頭到的北京么到不得？

知他，那話怎敢說？天可憐見，身已（已）安樂時，也到。

(2) 『朴通事諺解』(1677) 第一節

當今聖主，洪福齊天，風調雨順，國泰民安。又逢著這春二三月好時節，休蹉過了好時光。人生一世，草生一秋，咱們幾箇好弟兄，去那有名的花園裏，做一個賞花筵席，咱們消愁解悶如何？

(3) 『華音啓蒙諺解』(1883) 第一節

請問這位貴姓？

不敢，在下姓李。

從哪里來呢？

打朝鮮國來咧。

走咧多少日子麼？

走有十來天的功夫咧。

這麼說呢？你們離這裏有二千多裏地否咧，幾天的工夫何能到得麼？

如今我們是坐輪船來往的，所以不像從前起早來的時候兒。

これらの三段の文章の中で、下線を施した「京、今、去、幾、行、盡、見、齊、節、休、秋、兄、席、消、解、請、下、姓、像、前、起」という字は尖音團音である。この中には、「今」と「幾」は三段とも出現している。以下、この五つの教科書の尖音團音をそれぞれ探し、できるだけ五つの教科書とも出現

している尖音團音を取り出し、その音聲變化を觀察してみたい。今回は右側音のみを扱う。

そのような手順で探し出した尖音團音計 42 字の音聲が以下の表である（年代順による）。網掛けを施している字は音聲が變化したものである。（ハングルを IPA に轉寫した）

（注：老乞大諺解（1670）：①；朴通事諺解（1677）：②；朴通事新釋諺解（1765）：③；重刊老乞大諺解（1795）：④；華音啓蒙諺解（1883）：⑤）

表の調整

資料	京 (團音)	家 (團音)	教 (團音)	去 (團音)	幾 (團音)	鷄 (團音)	起 (團音)
①	kiŋ	kja	kjao	khju	ki	ki	khi
②	kiŋ	kja	kjao	khju	ki	ki	khi
③	tsiŋ	tsja	tsjao	tshju	tsi	tsi	tshi
④	tsiŋ	tsja	tsjao	tshju	tsi	tsi	tshi
⑤	tsiŋ	tsja	tsjao	tshju	tsi	tsi	tshi

資料	講 (團音)	橋 (團音)	行 (團音)	景 (團音)	兄 (團音)	解 (團音)	學 (團音)
①	kjaŋ	khjao	hiŋ	—	hjuŋ	kjə	hjo
②	—	khjao	hiŋ	kiŋ	hjuŋ	kjə	hjo
③	—		hiŋ	kiŋ	hjuŋ	kjə	hjo
④	tsjaŋ	tshjao	—	—	hjuŋ	kjə	hjo
⑤	tsjaŋ	tshjao	siŋ	tsiŋ	sjuŋ	tcjə	sjo

資料	見 (團音)	下 (團音)	斤 (團音)	價 (團音)	閒 (團音)	九 (團音)	金 (團音)
①	kjən	hja	kin	kja	kjən	kju	kin
②	kjən	hja	kin	kja	—	kju	kin
③	kjən	hja	kin	kja	—	kju	kin
④	kjən	hja	kin	kja	kjən	kju	kin
⑤	tsjən	cja	tsin	tsja	tsjən	tsju	tsin

資料	今 (團音)	腳 (團音)	休 (團音)	乞 (團音)	前 (尖音)	寫 (尖音)	小 (尖音)
①	kin	kjo	hiu	khi	tshjən	sjə	sjao
②	kin	kjo	hiu	—	tshjən	sjə	sjao
③	kin	kjo	hiu	—	tshjən	sjə	sjao
④	kin	kjo	hiu	khi	tshjən	sjə	sjao
⑤	tsin	—	—	—	tshjən	sjə	sjao

資料	心 (尖音)	酒 (尖音)	錢 (尖音)	清 (尖音)	請 (尖音)	消 (尖音)	姓 (尖音)
①	sin	tsiu	tshjən	tshij	—	—	siŋ
②	sin	tsiu	tshjən	—	tshij	sjao	—
③	sin	tsiu	tshjən	—	tshij	sjao	—
④	sin	tsiu	tshjən	tshij	—	—	siŋ
⑤	sin	tsiu	tshjən	tshij	tshij	sjao	siŋ

資料	節 (尖音)	秋 (尖音)	盡 (尖音)	將 (尖音)	簾 (尖音)	齊 (尖音)	席 (尖音)
①	tsjə	tshju	tsin	tsjaŋ	tshjən	—	—
②	tsjə	tshju	tsin	tsjaŋ	—	tshi	si
③	tsjə	tshju	tsin	—	—	tshi	si
④	tsjə	tshju	—	tsjaŋ	tshjən	—	—
⑤	tsjə	tshju	tsin	—	—	—	—

この 42 字は、本文で抜粋した部分の冒頭からの出現順の尖音團音の字であり、恣意的に選んだものではない。この 42 字の音聲状況によると、次のようなことがわかる：

(1) 『老乞大諺解』(1670) 『朴通事諺解』(1677) に出現した尖音 (TSi-) 團音 (Ki-) ははっきり区別されている。したがって、この時期は、尖音團音はまだ混同していなかった。

(2) 上の表の中、『朴通事新釋諺解』(1765) に出現した 21 個の團音字のうち、7 個は Ki- から TSi- に變化し、14 個はまだ Ki- を保っている。この後の『重刊老乞大諺解』(1795) に出現した 23 個の團音字は、9 個は Ki- から TSi-

變化し、14 個はまだ Ki- を保っていた。これによると、18 世紀後半から尖音團音の混同が始まったが、大部分の尖音團音はまだ區別を保ち、合流していなかったことがわかる。

(3) 『華音啟蒙諺解』(1883) に出現した尖音團音はすべて合流した。尖音團音は區別なく、すべて TSi- で表記されている。

ここで注意すべき點は、右側のハングル注音は tsi-, i-, i が區別できないため、具體的な音價は不明。『華音啟蒙諺解』は、ㄱ (TS) 系のうち、數箇所は ㄱ (下) になり、これは ㄱ 系かどうか不明)

5.2 朝鮮の韻書『華東正音通釋韻考』(1747) 中の「華音」

朝鮮の近代の學者朴性原が編んだ『華東正音通釋韻考』(1747) は、朝鮮漢字音を規範化するための韻書であり、ハングルで當時の朝鮮漢字音（東音）と清代中期の漢語官話音（華音）を注音した。『華東正音通釋韻考』は『老乞大諺解』、『朴通事諺解』の傳統を受け續いているから（姜美勳 2005 : 13）、この本は北京語に基づいて作られたと言えるだろう。そこで姜美勳（2005）の研究により、一部の尖音團音を取り出し、以下の表にまとめた：

韻攝	漢字	華音	東音	『廣韻』音韻地位
果	伽	khja	ka	平 戈 羣 開 三
假	姐	tsjə	tsjaə	上 馬 精 開 三
	寫	sjə	sja	去 禡 心 開 三
遇	且	tsju	tsjə	平 魚 精 合 三
	居	kju	kə	平 魚 見 合 三
蟹	祭	tsi	tsjəi	去 祭 精 開 三
	鷄	ki	kjəi	平 齊 見 開 四
效	焦	tsjao	tsjo	平 宵 精 開 三
	驕	kjao	kjo	平 宵 見 開 三 B
流	酒	tsiu	tsju	上 有 精 開 三
	穆	kiu	kju	平 幽 見 開 三 A

咸	尖	tsjən	tshjəm	平 鹽 精 開 三
	夾	kja	kjəp	入 洽 見 開 二
深	侵	tshin	tshim	平 侵 清 開 三
	急	ki	kɿp	入 緝 見 開 三 B
山	煎	tsjən	tsjən	平 仙 精 開 三
	潔	kjə	kjəl	入 屑 見 開 四
臻	均	kjun	kjun	平 諄 見 合 三 A
	七	tshi	tshil	入 質 清 開 三
宕	將	tsjaN	tsjaŋ	平 陽 精 開 三
	嬰	kjo	kak	入 藥 見 合 三
江	江	kjaN	kaŋ	平 江 見 開 二
	覺	kjo	kak	入 覺 見 開 二
曾	兢	kiN	kɿŋ	平 蒸 見 開 三
	卽	tsi	tsɿk	入 職 精 開 三
梗	驚	kiŋ	kjəŋ	平 庚 見 開 三
	錫	si	sjək	入 錫 心 開 四
通	菊	kju	kuk	入 屋 見 合 三

この表によると、1747 年頃北京語の尖音團音はまだはっきり區別されていたことがわかる。これは、『朴通事新釋諺解』（1765）と状況がほぼ一致する。ただ後者では、一部の尖音團音はすでに合流し始めている。これによると、『圓音正考』（1743）の頃北京語の尖音團音はまだはっきり區別されていたことが確實であろう。尖音團音の合流の始まった時間は 18 世紀中葉頃だと考えられる。

6. 滿漢合璧教科書『清文啓蒙』（1730）

『清文啓蒙』の初版は 1730 に刊行された。この本は當時の北京語を反映している（太田 1951：20）。筆者は三つの版本を調査した：『清文啓蒙』宏文閣藏板（早稲田大學藏）、『清文啓蒙』三槐堂梓行（關西大學近代漢語文獻データベース）『兼滿漢語滿洲套話清文啓蒙』（東洋文庫藏）。このうち、『兼滿漢語滿洲套話清文啓蒙』は滿洲文字で漢字に注音しているという特徴がある。竹越孝（2011：

8) の研究によると、この版本の刊行年代は 1761 年頃である。つまり、この中の注音は 1761 年の北京語の音聲を表している。尖音團音の状況は以下の通りである：

	轉寫	IPA	ページ
團音	見 jīyan	tɕian	1a
	技 jī	tɕi	1b
	去 kioi	khioi	2b
	豈 ci	tshi	1b
	喜 hi	xi	2b
	行 hing	xin	2a
	曉 hiyao	xiao	3b
尖音	嚼 giyao	kiao	24b
	就 gio	kio	2b
	趣 kioi	khioi	16a
	齊 ci	tshi	18a
	細 si	si	51a
	心 sin	sin	24a
	小 siyoo	sio	30a

網掛けを施している字によると、一部分の尖音團音はすでに混同されていた——ある字は口蓋化し（見技）、ある字は元々は團音だが、尖音で表記され（豈）、ある字は元々は尖音だが、團音で表記された（嚼就趣）。しかし、全書を見ると、ほとんどの尖音團音はまだ區別されている。したがって、1761 年頃の北京語において、尖音團音は混同され始めたと考える。これは、『朴通事新釋諺解』（1765）の状況とちょうど一致する。

ここで、注意すべき点がある。鋤田（2013）によると、『滿文三國志』（1650）の滿洲字による漢語の發音では、尖音團音の破裂音については區別がなく ji-、ci- と表記されていたと指摘している。しかし、この論文には、「精組字は ts、tsh という聲母を保ちつつ、牙音字のみ tɕ、tɕh へ變化しており、共に同一の滿洲文字である ji(-)、ci(-)」と表記されたと考える…喉音字に關してはそれと異なり、相互に混用されている様子が見られる…『滿文三國志』が基づいた方

言、齒音字及び舌音字に對する表記から、膠遼官話地域の影響がある可能性である」と指摘している。つまり、『滿文三國志』において、尖音團音の破擦音・破裂音はまだ區別され、喉音字が混用されている様子は見られるものの、この本の基礎方言は恐らく純粹な北京語ではなく、他の方言の影響を受けているものと推定される。

7. 結論

尖音團音の合流過程は、近代北京語における重要な現象である。異なった見解があるが、筆者の考察によって、以下のことがわかった：

(1) 『圓音正考』(1743) は精組細音と見組細音に「尖音團音」と命名し、これここから音韻學には新たな概念が出現した。原序(1743)と後序(1830)の内容によると、1743年頃に尖音團音はまだ區別され、1830年頃にはすでに混同された。

(2) 明朝から清朝までの韻書『重訂司馬溫公等韻圖經』、『李氏音鑑』、『圓音正考』と滿洲語と漢語で書かれた教科書である『清文啓蒙』、ならびに朝鮮時代の漢語教科書『老乞大諺解』、『朴通事諺解』などの文獻により、尖團の區別は、清代の前半(18世紀中葉)まで明らかに保たれていたが、18世紀中葉から、いくつかの尖音團音が混同され始め、19世紀前半までには尖音團音は統合が完了していたということがわかる。

『重訂司馬溫公等韻圖經』(1606)	}	はっきりと區別
『老乞大諺解』(1670)		
『朴通事諺解』(1677)		
『圓音正考』(1743)		
『華東正音通釋韻考』(1747)	}	混同開始
『兼滿漢語滿洲套話清文啓蒙』(1761)		
『朴通事新釋諺解』(1765)		
『重刊老乞大諺解』(1795)		
『李氏音鑑』(1805)	}	合流
『華音啓蒙諺解』(1883)		

北京語の尖音團音の統合は比較的長期間をかけて漸進的に行われた。『汉语

方言地图集』(2008:066)によれば、現代漢語の尖音團音の區別には程度差があり、地域によってその區別は25%から100%までに亘る。また、筆者が調査した雲南騰冲方言では、尖音團音の區別は世代によって違う。高齢者はまだはっきり區別しているが、若者は恐らく標準語の影響を受けた結果、尖音團音の混同が見られる。例えば「九」(團音) = 「酒」(尖音)。したがって、共時的な差異は歴史の漸進的變化を反映している。

ここで、注意すべき点がある。1913年民國政府の「國音統一會」が編纂した『國音字典』において、尖音團音の區別、入聲がまだ記載されていることである。これは南北方言を合わせて配慮したためであり、北京口語の實際の發音狀況とは一致しない。

参考文献

日本：

太田辰夫 1950「清代の北京語について」、『中國語學』34。

1951「清代北京語語法研究の資料について」、『神戸外國語大學論叢』2-1

鋤田智彦 2013「滿州字表記の漢語に基づく近世中國語音の研究」、早稻田大學博士論文レジュメ。

竹越孝 2011『「兼滿漢語滿洲套話清文啓蒙」翻字・翻譯索引』、神戸外國語大學外國語研究所。

藤堂明保 1960『ki- と tsi- の混同は18世紀に始まる』、『中國語學』第1號。

1966『北方話音系的演變』、『中國語學』第7號。

山崎雅人 1994「滿州語資料による滿州語及び漢語の通時的音韻變化の研究」、東北大學博士論文、文博第16號。

中國：

愛新覺羅・瀛生 1986《滿語讀本》，吉林教育出版社。

曹志耘主編 2008《漢語方言地圖集》(語音卷)，商務印書館。

鄧力群等主編 1995《當代中國的文字改革》，北京當代中國出版社。

馮 蒸 1997《尖團音與滿漢對音——〈圓音正考〉及其相關諸問題》，載馮蒸《漢語音韻學論文集》，首都師範大學出版社。

郭 力 2004《〈重訂司馬溫公等韻圖經〉研究》，載郭力著《古漢語研究論稿》，北京語言大學出版社。

姜美勳 2005《〈華東正音通釋韻考〉譯釋及其與現代韓語漢字音系比較研究》南開大學博士學位論文。

金基石 2001《尖團音問題與朝鮮文獻的對音》，中國語文。

李新魁 1997《普通話語音發展述略》，載《李新魁音韻學論集》，汕頭大學出版社。

林 燾主編 2010《中國語音學史》，語文出版社。

- 唐作藩 2011《漢語語音史教程》，北京大學出版社。
- 汪維輝主編 2005《朝鮮時代漢語教科書叢刊》(共四冊)，中華書局。
- 王福堂 1999《漢語方言語音的演變和層次》，語文出版社。
- 王 力 1985《漢語語音史》，中國社會科學出版社。
- 無名氏 1743《圓音正考》，清道光十年京都三槐堂刻本影印本，上海圖書館藏本。
- 楊亦鳴 1992《李氏音鑒音系研究》，陝西人民教育出版社。
- 楊亦鳴 王為民 2003《〈圓音正考〉與〈音韻逢源〉所記尖團分合之比較研究》，《中國語文》第2期。
- 楊自翔 1987《〈李氏音鑒〉所反映的北京音系統》，《語言研究論叢》(四)，南開大學出版社。
- 葉寶奎 2001《明清官話音系》，廈門大學出版社。

韓國：

奎章閣 2004『奎章閣資料叢書·語學篇』(서울大學校奎章閣)

ドイツ：

Möllendorff, P.G. von 1892 : *A Manchu grammar, with analysed texts*. Shanghai, Printed at the American Presbyterian Mission Press.

本稿は2013年6月22日に開催された早稲田大學中國文學會第38回春季大會において報告した原稿に改訂を加えるものである。貴重なご意見・ご指摘をいただいた方々に深く感謝申し上げる。

本稿は以下の研究項目に属する：清末民初北京话系统研究 (11JJD740006)，教育部人文社科重点研究基地重大项目。晚清民国时期的北京话系统及探源研究 (11WYA001)，北京市哲学社会科学规划重点项目。

* * *

作 者：陳 曉

Author: CHEN Xiao

標 題：清代北京話尖團音合流的歷史考證

Title: Jian yin 尖音 and Tuan yin 團音 of Bei jing hua 北京話 in Qing Dynasty 清朝

摘 要：本文對北京話尖團音合流的歷史進行了再探討。通過記錄近代北京音的韻書，近代韓國漢語口語教科書、韻書以及滿漢合璧教科書中北京話記音的考證，筆者認為北京話團音腭化始於18世紀中葉，但至18世紀末，

北京話大多數的尖團音字仍然有別，直到 19 世紀上半葉，北京話才完成尖團音的合流。同時，作者強調《圓音正考》（1743）對漢語語音學的重要價值在於尖團音術語的理論創新，并非意味着當時北京話的尖團音合流。

關鍵詞：北京語 尖音 團音 《圓音正考》